

天草灘

林 芙美子



白いペンキ塗りの壁は、雨のせみか、髭を噴いてゐた。狭い二等船室には、それでも床の間があり、違ひ棚には、花模様の花瓶に、牡丹色のつゝじが活けてあつた。青いビロードを敷きつめた部屋だつたが、小綺麗で、坊主枕が五ツ六ツ散らかしてある。白菊丸と云ふ名前で、五十二トンだと聞いたが、如何にも、天草通ひらしい小さい船だつた。

雨で、海上は灰色に煙つてゐた。案外おだやかな航海だつた。船が動き出して、茂木の港を離れると、船員が茶を運んで来た。鹽氣のある美味い綠茶だつた。黒っぽい緑色のジャケツを着た、中年の女が二等船室へ這入つて来た。狭いデッキで、この女は、さつきから、船員と一緒にたぐつたりしてゐたので、船員の細君でもあらうかと見てゐた。デッキでは此女は、黄いろい雨合羽を着てゐた。雨に濡れながら、繩を船員と一緒にたぐり寄せてゐた。

二等船室へ這入つて来ると、彼女は部屋の間へ陣取つて、「富岡へいらつしやいますか」と私に聞いた。私は、船の動揺が氣持が惡かつたので寢轉んでゐた。寢轉んで、長崎の本屋で買った、「草枕」を讀んでゐた。

私は、長崎の福島屋と云ふ旅館で五泊ほどしたが、こゝで二日目の夜、盜難にあつた。枕もとのスタンドをつけて寢てゐたのだが、疲れてうとうととしてゐた。險に射してゐた燈火がすつと暗くなつたので、何となく薄眼を開けた。眼のさきに女の後姿がぼつと見え

た。夢うつゝのなかで、卓上の時計や、机の下のハンドバッグが氣にかゝつたが、それは一瞬の旅人らしい不安さで、そのまゝ寢返りを打つて、私はこんこんと眠つてしまつた。

いつもの癖で、夜明頃に眼を覺ました。何時頃であらうかと、机へ手をのぼして、時計を探したがなかつた。廊下の硝子戸はまだ眞暗である。時計は洋服のポケットへでもしまつたのかと、寢床から手をのぼして、ハンドバッグを探してみたが、ハンドバッグもない。ハンドバッグと時計を失つた以外には、四圍は何の變化もないのだ。床の間や、洋服のかゝつた押入を探してみたが見當らなかつた。厭な氣持がした。随分寂もしたが、初めての盜難であつたので、強き消えていつたやうな紛失ぶりが、私には不思議でたまらなかつた。

船のなかで、「草枕」を讀みながら、まだ、私はその盜難事件にこだはつてゐた。長崎の新聞社で金を借りては来たものの、失つたものに就いての執着が、時々、夢うつゝで見た女の後姿に、どうしてもむすびついて来る。あれは錯覺だつたのだらうか、それとも、男の盜人がそつと這入つて来たのだらうか。何としても私にはなつとくがゆかない。

隣室の客も、時計を机の上に置いておいたのださうだが、これは盜まれなかつた。隣室の客は、枕もとの鞆を盜まれただけだつたが、これは、私の隣の空室に、私のハンドバッグと一緒に捨ててあつた。何も盜られてゐなかつたと見えて、巡查の來る前にその客は、鞆を持つて朝早い汽車で東京へ發つて行つた。

空部屋の片隅に、私のハンドバッグの中味の名刺が、散亂し、結

局、私のものだけが失はれてゐた。推理を進めてゆくうちに、「草枕」の活字は少しも眼にははいらなくなつた。

「富岡へ着くには、どの位かゝりますか？」
「一時間半位のもんです。此分では先きへ行つて、少し海上が荒れるかも知れません」

女は雨に濡れた赤っぽい髪をなでつけながら、横坐りになつてゐた。外地から引上げて来た女のやうに見えた。平べつたい、色の蒼黒い顔だつた。

「天草ですか？」
私は起きあがつて彼女に尋ねた。

「え、天草の本渡のものです。長らく青島にをりまして、子供二人かゝへてあなた、引揚げて來ましたのですよ」

「大變でしたね……」
「え、もう、とても子供づれで、あなた、無一物になつて戻りましたから、遊んではをられません」

「何をなすつていらつしやるんです？」
「いまだですか、いまは、玉子の仲買ひをしてをります。毎日のやうに、この船で茂木まで賣りに行つてをりますと……」

玉子の商賣が、どの位の利益になるものか、私には判らなかつたが、深くせんざくして尋ねる事はしなかつた。私は、暫く、呆んやりと窓を見てゐた。鉛色の水平線が、窓の外で高くなつたり、低くなつたりしてゐる。「天草はおはじめてですか？」彼女が聞いた。

「いえ、もう十二年前昔でしたが、一度來た事があります。